

## 令和2年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：根室地区
- 2 事例報告学校名：羅臼町立羅臼小学校
- 3 報告者職・氏名：校長・野呂 幸生

1 キーワード：持続可能な社会づくりに取り組む児童の育成  
～知床学（海洋教育）を中心とした教育活動～

### 1 はじめに

本校は、全校児童130名程度で推移する知床世界遺産の中心に位置する東西を山と海に囲まれた自然豊かな地域の学校である。

さて、2年前に「羅臼が好きですか？」と児童に質問したところ、「そう思わない」とする回答が過半数を超えていた。この現状を改善するために教育課程の改善充実を図った。

特に、各教科との関連を図りながら、知床の人・物・自然からふるさと羅臼を包括的にとらえる「知床学」（海洋教育）を総合的な学習の中心に据え、SDGs（持続可能な社会づくり）の17の目標を踏まえて学習活動を展開した。17の目標の中では、特に「11 住み続けられるまちづくりを」、「14 海の豊かさを守ろう」、「15 陸の豊かさをももろう」を重視した。

羅臼町の良さを実感できる学習を進める中で、児童が人・物・自然とかかわり、人とつながり、知をつなげ、相互で協力し学び合える能力を高めることにより、自分自身が地域の中で支えられていること、将来自分が同じ地域の人や物にその思いを行動として返していくことができる大人へと成長することを目標とした。

### 2 実践の概要

#### (1) 「知床学」における知床の人・物・自然からの学び（特にSDGs 11・14の目標）

専門的な知見をもつ羅臼漁業協同組合職員や知床財団職員、漁業を生業とする保護者を講師として招き、児童が体験を通じて地域の人・物・自然から学ぶことができたようにした。2年生では漁協・地域住民から鮭の生態や稚魚を放流する意味について説明を受け、3年後の回帰を願い稚魚放流を行った。この学習を通じ、児童は鮭の生態について学ぶだけでなく、羅臼の自然の豊かさや地域住民の行動から、よりふるさと羅臼に対する思いを強くもった。3年後の「鮭の有効活用～鮭フレック作り～」につなげ、海の豊かさや大切さを実感させたいと考えている。学習を終えた子どもたちからは、「鮭が帰ってくるのが楽しみ。」という感想だけでなく、「鮭のために川をきれいにしたい。」、「鮭がちゃんと羅臼に帰ってこられるように川や山をきれいにしたい。」という声が聞かれた。



【漁協職員から魚の説明を受ける市場見学】

第5年生が行った市場見学では、多く種類の魚が羅臼の海から水揚げされることを知るだけでなく、市場の仕事を通し、そこにかかわる地域住民が地域の産業を大切にしていることに触れたり感じたりしながら、「羅臼の海が素晴らしいということを改めて感じた。」、「地域の人たちが守ってきた海を自分たちもしっかりと守りたい。」などの感想をもつことができた。

また、地域住民が児童の学びを支えようとする姿を見て、児童は真剣に学習するようになり、地域の素晴らしさを実感することができた。

#### (2) 「羅臼昆布図鑑」の学習を通じた地域のよさの再発見（SDGs 11・14・15の目標）

第5学年では、これまでの各教科や総合的な学習の時間の学習から羅臼昆布を題材とした「羅臼昆布図鑑」づくりを行った。児童一人一人が羅臼昆布について課題意識を持ち、課題に応じて自然環境や販売・商品開発などのグループを作って課題解決にむけた学習を行った。そして

調べたり考えたことを「羅臼昆布図鑑」としてまとめ、地域の「ユネスコスクール発表会」や「全国海洋教育サミット」などで外部に発信した。地域の「ユネスコスクール発表会」や「全国海洋教育サミット」では、地域住民と交流したり、全国海洋教育サミットの児童生徒と交流することにより、地域の素晴らしさを再発見することができた。また東京での「全国海洋教育サミット」では、「東京羅臼会」の方々と交流することを通して、地域を離れても羅臼を大切にできる思いに触れることができた。

これらの学習を通じ、児童は単に羅臼昆布について知るだけでなく、より地域に対しての愛着を深め、自分が大人になったとき、地域を支えようとする気持ちをもつことができた。さらには、人々との対話や交流から、コミュニケーション能力高めることができた。こうした学びの深まりは、児童の自ら課題を見つけ、課題を解決するために進んで行動する主体的な姿につながっている。



【羅臼町ユネスコスクール発表会】

### (3) 「ふるさと羅臼」のよさを知り、守る活動へ（主にSDGsの11の目標）

「羅臼昆布図鑑作り」の学習を通じて羅臼の良さや課題を捉えた6年生は、これまでの学習で学んできた羅臼のよさを行動とともに発信する学習に取り組んだ。「羅臼に残したいもの」をテーマに、自分たちが感じた羅臼の魅力をリーフレットやポスターで発信するグループ、ボランティアを募って地域の温泉の清掃活動を行うグループ、地域芸能の素晴らしさをインターネットで発信するグループ等を構成し、児童が主体的に活動できるように工夫した。

温泉の清掃活動を行った児童は、清掃後に「作業はとても大変だったけど、この温泉をずっと羅臼に残したい。」と話すなど、具体的な活動を企画し行動することを通して、地域のために協働する喜びややりがいを実感することができた。このような高学年の姿を見た下級生にも、日常的に地域のゴミを拾うなど地域のために行動する姿が見られるようになってきた。



【瀬石温泉の清掃活動】

## 4 おわりに

SDGsの考え方を取り入れて教育課程を編成したことにより、児童が地域社会の一員として、地域を守っていくことの大切さとどのように行動すれば、よりよい方法で地域を持続させていくことができるかを考えられるようになった。また、多くの地域住民に協力を得て学習を行うことにより、より深くふるさとについて知り、郷土に対する誇りや愛着を育むことはもとより、自分たちが大人になったときに地域を支えることの期待感を高めることができた。さらに多くの人々、物との出会いを通して、自らの生き方を考えることができ、将来の自分の職業選択や今の学びをどのように将来につなげていくか考える機会となった。

10月に第6学年の児童に行ったアンケートでは「あなたは羅臼が好きですか。」の設問に対して、100%の児童が「羅臼が好き。」と回答した。その理由として「自然が多く、たくさんの生き物に囲まれ、町民一人ひとりがやさしいから、羅臼は私の自慢のふるさとです。」などの記述が見られ、実践の成果が現れていると考えられる。今後も取組の工夫や一層の充実を図りたい。



【第2版 羅臼昆布図鑑】